

報告

コミュニケーション教育の実践と評価について考える： CEFR と ELP を参考にした学習者の成長の捉え方

山形大学
石橋 嘉一

1. はじめに

本小論では、平成25年8月9日・10日に開催された、第5回ヘルスコミュニケーション学会学術集会 セッション2「コミュニケーション教育の理論と実践」で発表した内容を報告する。

本発表の目的は以下の2つの課題を提起し、その課題の解決方法を提案し、ヘルスコミュニケーション学の発展に寄与することであった。(1)コミュニケーション教育を実践し、その評価を学習者の成長という観点で実施する場合、どのような方法が可能であろうか。(2)(1)についてヘルスコミュニケーションの文脈で考える際に、どのような先行研究・事例が参考になるであろうか。上述の課題について、以下の2つの視点から発表した。(1A)人間関係の根幹を成すコミュニケーションは、言語、非言語(顔の表情や動作等)など、多様な要因が複雑に関連し合うが、本発表では言語によるコミュニケーションに焦点をあて、近年のヨーロッパ連合(EU)で活用されている、外国語学習の参照枠(CEFR)を参考にした。(2A)(1A)をもとに、様々な医療現場の状況に応じた「～ができる」という能力参照枠をもとに、学習者の成長を段階的に評価し、医療従事者のコミュニケーション教育の成果を可視化する方法を提案した。

2. 能力参照枠を用いた言語コミュニケーションの評価

欧州評議会(Council of Europe)は、2001年に「外国語の学習、教授、評価のための共通参照枠組み(CFER*)」と「言語学習記録帳(ELP**)」を刊行した。これらの教育的ツールは、従来、理念的に語られることの多かった「コミュニケーション」という概念を、38の場面(例:「公式のミーティング」「目的達成のための協同作業」等)のコミュニケーション言語活動としてカテゴリ化し、初心者から熟達者に至る段階的能力指標で学習者の成長を捉えている。例えば、「会話」という状況設定では、以下の6段階の能力指標が例示されている(1が初心、6に向かう順に熟達)。(1)紹介や基本的な挨拶ができる、(2)非常に短い社交的なやり取りには対応できる、(3)身近な話題についての会話なら準備なしに参加できる、(4)自分の気持ち、個人的な出来事や経験を伝えることができる、(5)感情表現、冗談などを交ぜて、柔軟に言葉を使うことができる、(6)社会や個人生活全般に渡って適切に自由に会話ができる。このように「～ができる」という表現はcan-do-statementと呼ばれ、初心者から熟達者に至る学習者の成長を定義することができる。CEFRはヨーロッパで開発された指標であり、社会文化的に日本の文脈には馴染まないという意見がある。また、外国語学習に特化した参照枠でもある。しかしながら、実社会で想定される様々なコミュニケーションの場面設定に応じて、「～ができる」という表現で初心者から熟達者に至るプロセスを明確に言語化する方法は看護の現場でも参考にできるのではなかろうか。例えば、看護における多重課題のマネジメントにおいて、初心者と熟達者の相違は何か。熟達者は何が(どのような項目の動作が、どう適切に)できるようになるのであろうか。また、異なる例では、救急搬送の電話応対において、初心者と熟達者ではどのようなコミュニケーション上の相違があるであろうか。本発表の前半では、こういった場面設定に応じた言語コミュニケーションの能力指標から、コミュニケーション教育の評価を試行する方法を提案した。

3. 言語学習記録帳(学習ポートフォリオ)を活用した学習者の成長の捉え方

次に、ELPと呼ばれる言語学習記録帳を紹介した。ELPはCEFRの参照枠を活用した、学習者が自己の学習を振り返るための教育ツールである。ELPは、(1)Language Passport(言語パスポート)、(2)Language

Biography(言語学習記録帳), (3) Dossier(言語資料集)の3つから構成されている。ELPの主な機能は、学習の記録と内省である。学習者は授業や課外活動で使用したワークシートやプリント類をELPに保管・記録していく。そして、学習後に自分の特定の領域のコミュニケーション言語活動が、どの程度できているのかを、CEFRの能力指標を参考に自己評価を記述する。自己評価は参照枠にチェックを入れたり、自由記述も併用する。また、場合によっては学習者と同じ参照枠を用いて教員からも評価を行う(他者評価)。当然学習者と教員の評価が同じである場合もあれば、異なる場合もある。そのため、定期的に学習者と教員が、ELPを介して話し合いを行う。これはポートフォリオ・カンファレンスと呼ばれ、学習者が自己の成長を内省・把握し、次段階の学習目標を定める重要な機会を与えている。

本発表の後半では、このような学習記録帳を通じた成長の捉え方を紹介し、最近接発達領域(ZPD)などの理論的枠組みとも照らし合わせて説明を行った。

4. おわりに(コミュニケーション教育の実践と評価について考える)

本発表では、CEFRとELPの事例を参考に、医療現場のコミュニケーション教育の実践と評価について検討してきた。一つ目の提案は、医療現場の様々な場面設定に応じて、言語コミュニケーションを初心者から熟達者に至る段階的な能力指標で想定してみることであった。これにより、医療従事者個々人の理念的なコミュニケーション観に、ある程度一定の共通性、透明性を構築し、評価の客観性を高める方法を提案した。次に、能力指標に基づいた学習記録帳を活用することで、学習者は現段階の自己の到達度を内省することができ、かつ次段階の学習目標を把握することもできる。また、必要に応じて、教員やクラスメイトの手助けや他者評価を介することで、学習または評価が適切に遂行でき、学習者の成長を促進させることを紹介した。

最後に、CEFRとELPは、学習成果の質保証、単位互換、ポートフォリオ評価等、近年の文部科学省が提言する大学教育改革の方向性と親和性が高いため、それらへの応用の視座も提案した。

[注]

*Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment

**European Language Portfolio

[参考文献]

Council of Europe. (2001). Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment. Retrieved June 27, 2013, from http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Cadre1_en.asp

int/t/dg4/linguistic/Cadre1_en.asp

Morrow, K. (2004). (Ed.) *Insights from Common European Framework*. Oxford: Oxford University Press.

[略歴]

石橋 嘉一(いしばし よしかず): 国立大学法人 山形大学 エンロールメント・マネジメント部 准教授
コミュニケーション教育について教育工学, コミュニケーション学観点から研究. 文部科学省GP・概算要求事業等の大学教育改革を推進. 日本コミュニケーション学会副広報局長.